

コリマ・ユカギール語における節連接の五段階について

遠 藤 史

1. はじめに

複文においては2つ以上の節の結びつき、または2つ以上の節の接続が起こっている。このような複数の節の結びつき、または複数の節の接続を、角田（2012）にならって「節連接」（clause linkage）と呼ぶことにしよう。このような節連接はさまざまな視点から研究することが可能であるが、言語記述において従来から最も一般的に行われてきたのは、その統語論的な記述、およびその前提となる形態論的な記述であった。しかしながら近年になって、他の側面からの研究、とりわけ意味的および語用論的な性質に注目した節連接の研究が様々な言語において現われてきている。

本論文はこのような節連接の意味的および語用論的な性質の検討に向けられる。具体的には、コリマ・ユカギール語という一言語の複文において、節連接の意味的および語用論的な性質という観点から、副詞節と主節がどのように結びつくことができるかという可能性を検討する。またその検討を行うことによって、他の諸言語とも共通する、節連接に関する重要な性質が、コリマ・ユカギール語にも認められうることを示す¹⁾。

本論文での検討の手がかりとなる、節連接についての枠組は、角田（2012）が「節連接の五段階」（five levels in clause linkage）と名付けたものである。「節連接の五段階」は、副詞節と主節の結びつきの関係は五つのレベルに分けることができるとする仮説で、日本語の副詞節と主節の結びつきを詳細かつ体系的に考察した角田（2004）の研究に基づいている。角田（2012）はこの研究成果を一般化した観点から、必ずしも系統的關係、あるいは言語接触などによる影響関係を有しない、世界各地の諸言語に関して、副詞節と主節との結びつきにおいて、この「節連接の五段階」がどのように見られるかを調べてみることを提案している。この提案を受けて、コリマ・ユカギール語の節連接のデータを調べた結果が本論文の基礎を成している²⁾。

1) 本論文の内容は2011年12月11日に国立国語研究所で行った筆者の研究発表“Five levels in Kolyma Yukaghir: a preliminary study”に基づいている。この発表は国立国語研究所の基幹型共同研究プロジェクト「節連接へのモーダルの・発話行為的な制限」の一環として行われた。プロジェクトリーダーの角田太作教授（当時；現在は名誉教授）には、この共同研究プロジェクトにお招きいただき、ご指導・ご助言をいただいたことに対し深く感謝申し上げます。またプロジェクトメンバーの皆様方には、当日の発表に対し貴重なご意見をくださったことに感謝いたします。

2) 本研究はJSPS科研費22520434の助成を受けたものです。フィールドワークの際、コリマ・ユカギール語とユカギールの文化について詳しく、また親切に教えてくださったネレムノエ村の皆様方に感謝申し上げます。

本論文の構成は次の通りである。次の第2節では、主として角田（2004）の研究成果に基づいて、「節連接の五段階」の仮説の概略を示す。この節で提示する例の多くは日本語である。第3節以降はコリマ・ユカギール語の検討に移る。まず第3節では、コリマ・ユカギール語とはどのような言語であるか、いくつかの類型論的特徴を用いて、その概略を簡単に述べる。続く第4節では、コリマ・ユカギール語の文の基本的な構造を提示する。第5節では、この言語の節連接のデータを考察する前提となる、副詞節を含む複文の諸特徴を指摘する。以上の考察に基づいて、第6節では、コリマ・ユカギール語における「節連接の五段階」について、具体的なデータをあげつつ、それらを詳しく検討する。第7節ではその検討の結果をまとめる。第8節は全体の結びである。

2. 「節連接の五段階」の仮説

角田（2004）は日本語の節連接に関する詳細かつ体系的な研究である。特にその第2章において、角田（2004）は節連接、中でも特に従属節と主節の結びつきを考察した。その結果、従属節と主節の関係において、「接続表現の種類、あるいは従属節の種類により、連接する主節のモダリティ、および主節との接続による意味関係がおおよそ以下の五つのレベルに分けられることがわかった」（11）と主張した。角田（2012）のいう「節連接の五段階」とは、この主張を指している。なお、ここでモダリティとは概略、節において表わされている客観的な事態（あるいは命題）に対して、発話時点で話者が持つ様々な心的態度のことをいう。たとえば日本語では、判断を示すモダリティ表現の例としては、ヨウダ、ラシイ、カモシレナイ、ハズダなどがあげられる。また発話行為を示すモダリティ表現の例としては、依頼、命令、禁止（～ナ）などがあげられる。

この五つのレベルはどのような特徴を持つものだろうか。角田（2004:11）によると、全体はまず大きく三つのレベルに分けられるという。角田（2004）が概観するそれぞれのレベルの特徴は次の通りである。まず「一つは従属節と主節の結びつきが、従属節で表わす事態と、主節で表わす事態との、出来事としてのつながりを中心とするもの」（11）と規定される。以下でより詳しく見る通り、この出来事としてのつながりを表わすレベルは、さらに三つのレベルに分けられる。残りの二つのレベルについては、「従属節と主節の結びつきが、出来事、言い換えれば命題部分ではなく、特にモダリティ部分にかかわるものである」（11）とされる。さらにそれらのうち「一つのレベルは判断を表わすモダリティ、もう一つのレベルは発話行為を表わすモダリティとの関係が深い」（11-12）と規定される。

それでは実際に、角田（2004:12-13）の述べる主張の重要部分を要約し、そこにあげられている日本語の例文を引用して、五つのレベルを具体的に観察してみよう。まず意味的な面から見ると、レベルIからレベルIIIまでは、従属節が述べる事態と主節が述べる事態が出来事としてつながっているものである：

レベル I 「現象描写」のレベル

主節は現象描写を行う。従属節で述べる事態と主節で述べる事態が、出来事、事態としてつながっている。例文は次の通り：

- (1) お腹が空いたので、ラーメンを食べた。
- (2) このボタンを押すと切符が出る。

この場合、(1) は既実現された事態であるのに対し、(2) はまだ実現されていない事態も表わしうる。両者はともにレベル I に入る。

レベル II 「判断」のレベル

主節が判断を示す。具体的な表現としては、ヨウダ、ラシイ、価値判断、義務、免除、禁止（テハイケナイ）、許可、推測、後悔、感情、願望、意思、真偽判断（カモシレナイ、チガイナイ、ハズダ）など様々なものがある。例文は次の通り：

- (3) 宿題を出せば、掃除をしなくてもよい。
- (4) 午後は熱くなるので、泳ぎに行くつもりだ。

ここで (3) の主節には許可（テモヨイ）が、また (4) の主節には意思（ツモリダ）が含まれている。従属節で述べる事態と、主節で述べる事態は、このレベルでも出来事としてつながっている。

レベル III 「働きかけ」のレベル

主節が、相手への働きかけを示す。具体的な表現としては、助言、警告、依頼、勧誘、禁止（～ナ）、命令などがある。例文は次の通り：

- (5) 仕事が終わったら、はやく帰りなさい。
- (6) 勉強しているのに邪魔するな。

ここで (5) の主節には命令（ナサイ）が、また (6) の主節には禁止（ナ）が含まれている。一方このレベルでも、従属節で述べる事態と主節で述べる事態は、事態としてつながっている。

次にレベル IV とレベル V に至ると、この両者では、従属節と主節が出来事としてつながっているのではなく、主節のモダリティ部分と結びつく関係を示している：

レベル IV 「判断の根拠」のレベル

従属節が判断の根拠を示し、主節が判断を示す。すなわち、従属節で述べる内容を前提あ

るいは根拠として、主節で判断を述べる。例文は次の通り：

- (7) 地面が濡れているから、雨が降ったのだろう。
 (8) 花子が使っているなら、よい化粧品にちがいない。

たとえば(7)においては、従属節が述べる内容（地面が濡れている）を根拠として、主節で話者による判断（雨が降ったのだろう）が行われている。

レベルⅤ「発話行為の前提」のレベル

主節が発話行為を示し、従属節はその発話行為の前提、前置きを示す。この場合、従属節は主節の発話行為を行うこと自体の前提となる。例文は次の通り：

- (9) 出かけるなら、オーバーを着ていったほうがいいわよ。
 (10) めがね、テレビの上にあったよ。いつも探してるから。

たとえば(9)においては、従属節の述べる内容(出かける)を前提として、話者による助言(着ていったほうがいいわよ)という発話行為が行われている。

以上においてレベルⅠからレベルⅤまでを、主として意味的な特徴に注目して観察してきた。それでは表面に現れた日本語の構造において、これら五つのレベルはどのような特徴を示すのだろうか。角田（2004:25）は、従属節・主節・モダリティおよび接続表現が現れる位置について、次のような表にまとめている（表1、ただし原書にある詳しい注は省略した）。ここではレベルⅠ～ⅢとレベルⅣ～Ⅴの間に大きな違いがあるという：

<表1>従属節、主節、モダリティと接続表現の関係

Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの場合：

- ① [従属節に表れている事態—接続表現 主節に表れている事態] モダリティ
 ② 従属節に表れている事態—接続表現 主節に表れている事態—モダリティ

Ⅳ、Ⅴの場合：

従属節		主節
[[事態の内容] モダリティ]	—接続表現	[事態の内容] モダリティ
	└──────────────────┘	↑

なお、角田（2004）はさらに、レベルⅣ、Ⅴの場合の主節のモダリティについて、「文面に現れている場合もあるし、(中略)隠れている場合もある」（24）と述べている。この「隠れている場合」を論じる際に、角田（2004:16）は次のような例文をあげている。

- (11) スポーツマンシップにのっとり、精一杯戦うことを誓います。
- (12) スポーツマンシップにのっとり、精一杯戦います。
- (13) 罰として、一週間ひとりで掃除をすることを命じます。
- (14) 罰として、一週間ひとりで掃除を下さい。

角田 (2004:16) の議論によれば、これらのうち発話行為動詞 (誓う, 命ずる) が文面に現れている例文 (11) および (13) では、モダリティは表面に現れている。それに対して、発話行為動詞が文面に現れていない例文 (12) および (14) では、モダリティは文面に表れていないけれども、それに相当する隠れた発話行為のモダリティがあると考えられる。この後者のような例を角田 (2004) は「隠れた発話モダリティ」(あるいは「隠れたモダリティ」)と呼んでいる。このような例を検討する際には、細心な読みが必要となるであろう。

以上に提案された五つのレベルは、節接続にどのように反映しているのだろうか。提示される仮説は、「日本語の多様な接続表現の使い分けには、(…) 五つのレベルの違いが反映している」(角田 2004:26) というものである。角田 (2004) では日本語の様々な接続表現のうち、原因・理由 (タメ (ニ), ノデ, カラ), 逆接 (ナガラ, ニモカカワラズ, ノニ, ガ・ケレド), および条件 (ト, バ, タラ, ナラ) が考察の対象となっているが、節接続においてこれらの接続表現の出現状況を調べてみると、接続表現の使い分けには歴然とした違いが認められるという。すなわち、「(…) 原因・理由を表わす接続表現についても、逆接を表わす接続表現についても、条件を表わす接続表現についても、日本語では五つのレベルの違いにより、使える接続表現が異なることがわかった」(角田 2004:26) という結果が得られる。

以上の結果をまとめた表が角田 (2012:18) に提示されている (表 2)³⁾。この表においては、角田 (2004) が考察した様々な接続表現 (以下、副詞節のマーカと呼ぶ) から主要なものを選び、それらについて、上記の五つのレベルにおいて、それらのうちどれが出現できるか(あるいは、できないか)をまとめている。選ばれた副詞節のマーカは、角田 (2004) と同じく、原因・理由を表わすもの、条件を表わすもの、そして逆接を表わすものである。

3) この表は、角田 (2004:27) に示された元の表に、その後の研究に基づいてさらに改訂を加えたものであることが角田 (2012:18) から知られる。それゆえ、新しい方の表を引用した。

<表2>日本語における節接続の五段階

	I	II	III	IV	V
原因・理由					
ために	+	△	-	-	-
ので	+	+	△	△	△
から	+	+	+	+	+
条件					
と	+	△	△	△	△
ば	+	+	△	△	△
たら	+	+	+	△	△
なら	-	△	△	+	+
逆接					
ながら	+	+	△	-	△
にもかかわらず	+	△	-	-	-
のに	+	+	△	-	-
が、けれども	+	+	+	+	+

+無条件に使える。

△やや不自然である，または，条件付きで使える。

-使えない。

表2に関して，角田（2012:14-17）があげている例文とともに，原因・理由を表わす副詞節に関する接続表現の分布の結果を引用する。この箇所では日本語の原因・理由を表わす副詞節のマーカ―として「から，ので，ために」の三つが考察されている。まずレベルIにおいては，この三つはいずれも問題なく使えるという⁴⁾。

(15) 雨が降ったから，試合が中止になった。

(16) 雨が降ったので，試合が中止になった。

(17) 雨が降ったために，試合が中止になった。

レベルIIにおいては，「から，ので」は使える一方で，「ために」は，やや不自然な場合があるという。ここでは，主節の末尾に意思を示す表現（ツモリダ）が現れていることに注意されたい。

(18) 父が入院したから，大学をやめて働くつもりだ。

(19) 父が入院したので，大学をやめて働くつもりだ。

(20) ?父が入院したために，大学をやめて働くつもりだ。

4) 以下の例文において，疑問符(?)が先頭にある例文は「不自然」，アスタリスク(*)が先頭にある例文は「使えない」を示す。判断は角田（2012）によるが，その判断は筆者のものとも一致する。

レベル III においては、「から」は使える。「ので」はやや不自然であり、「ために」は使えないという。ここでは、主節に働きかけを示す表現（ヨウ）が現れている。

- (21) 雨がやんだから，出かけよう。
- (22) ? 雨がやんだので，出かけよう。
- (23) * 雨がやんだために，出かけよう。

レベル IV においては、「から」は言える。「ので」は（全く言えないとは断定できないが）かなり不自然であり、「ために」は全く言えないという。ここでは、「消防車が来た」ことを根拠として、「火事でもあったのだろう」という判断が行われている。

- (24) 消防車が来たから，火事でもあったのだろう。
- (25) ? 消防車が来たので，火事でもあったのだろう。
- (26) * 消防車が来たために，火事でもあったのだろう。

最後にレベル V においては、「から」は言える。その一方で、「ので」と「ために」は言えないという。

- (27) ビールは冷蔵庫の中にあるよ。随分喉が渴いているようだから。
- (28) * ビールは冷蔵庫の中にあるよ。随分喉が渴いているようなので。
- (29) * ビールは冷蔵庫の中にあるよ。随分喉が渴いているようなために。

角田（2012）によれば、ここでは「ビールは冷蔵庫の中にあると教えてあげる発話行為の前提を、副詞節が表わしている」（17）という。なおこのレベル V の例文においては、日本語としての自然さを上げるために、副詞節が主節に後置されていることに注意されたい。

角田（2012:14-17）が検討した以上の結果は、上記の表 2 の一番上の欄（原因・理由）にまとめられている。ここで注目すべきなのは、ともに原因・理由を表わしうる副詞節のメーカーでありながら、それらの出現可能性が上記の五つのレベルに関して異なり、またその異なり方には五つのレベルに沿った方向性が認められる、ということだ。つまり、「から」はレベル I からレベル V のすべてのレベルにおいて言えるのに対して、「ので」が自然に言えるのはレベル I とレベル II に限られ、レベル III 以上ではいずれも不自然に響く。「ために」の分布はもっと限られており、レベル I でのみ自然であり、レベル II では不自然に響き、レベル III 以上では使えない。以上を要すれば、上記の五つのレベルを一種のパラメータとして、

これらの副詞節のマーカの出現可能性が記述できることになる。すなわち、この五つのレベルは、日本語の副詞節の記述において、非常に興味深い視点を提供してくれる可能性があることを示唆する。

なお、以上のことは、レベルが上がっていく（レベルⅤの方向に近づいていく）につれて、すべての副詞節のマーカが使いにくくなっていくことを必ずしも意味しない。角田（2012:20）も指摘している通り、日本語の条件をあらわす「なら」（および英語の原因・理由を表わす since）については逆に、レベルⅣとレベルⅤの方が使いやすい（日本語の「なら」についての結果は表2の二番目の欄（条件）を参照）。しかしながら、このこともまた、上記の五つのレベルが副詞節の記述において有効性をもちうることを意味するだろう。すなわちこのような出現可能性の上昇の記述もまた、上記の五つのレベルをパラメータとして用いることによって有効に行うことができるからである。

以上のように、角田（2004）が提案した五つのレベル、あるいは角田（2012）の用語を使えば「節接続の五段階」は、少なくとも日本語の副詞節の記述に関して、有効な仮説であることが期待される。とすれば、日本語以外の他の言語について、この仮説はどれほど有効なのか調べてみることは興味深い試みであろう。もしこの仮説が日本語以外の他の言語についても有効であることが分かった場合、この仮説の妥当性はより強められることになると考えられる。そこで本論文では、次の節以下において、コリマ・ユカギール語という一つの言語に関して、「節接続の五段階」の仮説がどれほど有効なのか、実際のデータにあたって調べてみることにしたい。

3. コリマ・ユカギール語の概略と類型論的特徴

この節では、コリマ・ユカギール語とはどのような言語であるか、いくつかの視点や類型論的特徴を用いて、その概略を簡単に述べる。それとともに、次節以降でコリマ・ユカギール語のデータを検討するために必要な用語も導入することにした。これ以降、すでに発表されている、他の研究者による論文・著書・テキスト資料等から資料を引用する場合は、引用元を示す。引用元が書かれていないコリマ・ユカギール語の資料は、筆者がフィールドワークにおいて、母語話者の助けを借りて収集したものである⁵⁾。

コリマ・ユカギール語は、北東シベリアにおいて、コリマ川上流のタイガ地帯、特にヤサーチナ川（コリマ川の支流の一つ）流域を中心に話される少数言語である。この言語は、17

5) 以下に検討する例は、コリマ・ユカギール語の民話テキスト集である Nikolaeva (1989a, b) と Nikolaeva (1997)、およびこの言語の記述文法である Maslova (2003) から引用し、筆者がフィールドワークで収集した資料を加えた（その一部は遠藤 (2005) ですでに検討している）。音素の表記が各資料によって異なるため、必要に応じて音素表記を統一している。また、術語の統一のため最小限のグロスの変更（特に動名詞の所格形に関して）を行ったほか、必要な箇所は日本語に訳している。民話テキスト集からの引用の場合、グロスは原文を参考に筆者が補った。

世紀に帝政ロシアが進出して来る以前から話されていた、この地域における先住民の言語の一つである。コリマ・ユカギール語と密接な系統的関係を有するのがツンドラ・ユカギール語（コリマ川下流地域から北極海沿岸に話される）である。現在まで存続しているユカギール語はこの二言語だけであるが、すでに消滅してしまった同系のいくつかの言語（オモク語、チュワン語など）を含めれば、帝政ロシア進出以前、ユカギール語は東シベリア一帯のより広い、連続した地域で話されていたことが知られている。

ユカギール語は系統的に孤立した言語であり、他の語族との系統的関係はまだ確立されていない。ユカギール語がウラル語族と系統的関係を有するのではないかという仮説が Collinder (1940) をはじめ何人かの研究者によって提起されてきた。しかし今日に至るまで、この問題に関する確固とした結論はまだ出されていない。

コリマ・ユカギール語はいわゆる「消滅の危機に瀕した言語」の一つである（英語では *critically endangered* と規定できるだろう）。コリマ・ユカギール語の流暢な話者数は約 20 人前後と思われる。話者の大半が高齢であることを考えれば、近い将来の消滅が危惧される言語の一つである。

コリマ・ユカギール語の音韻論の概略は次の通りである：

(A) 音素 子音音素は 21 個ある：/p, b, t, d, k, g, m, n, n' [nʰ], ŋ, r, ɕ [tʃ~ʃ], ʃ [tʃ~ʃ], ʒ, ʒ, ʒ, ʒ, w, j, l, l' [lʰ] /。母音音素は 6 個ある：/i, e, ö, a, o, u/。本論文ではコロンを使って長母音を表記することにする：/i:, e:, ö:, a:, o:, u:/。音素の表記については研究者間で若干の不一致があり、たとえば Maslova (2003) は、子音音素に関して、上記 /j/, /ʒ/, /ʒ/ について、それぞれ /d/, /q/, /h/ という表記を採用している。また Nikolaeva (1997) は弱化した母音 /e/, /o/, /a/ を、/ə/ と表記している⁶⁾。

(B) 超分節音素 強勢（強さアクセント）が単語中の一つの音節に置かれ、単語を音的に統合する機能を果たしている（弁別的機能はほとんど認められない）。強勢の置かれる位置は、単語中の最後の重音節（子音で終わる音節、および長母音あるいは二重母音を含む音節）である：pojórɣo「日」、anubúske「ボート」、lúnbuge「鍋」、kučé:「蚊」など。単語の中に重音節がない場合、強勢の置かれる位置はたいていの場合は予測しがたく、おそらくは単語ごとに決まっていると考えられる：nime「家」、nódo「鳥」、pemé「シラミ」、térike「妻」、omóče「良い」など。

コリマ・ユカギール語の形態論・統語論の概略は次の通りである：

6) ただし、/ə/ が他の母音音素との間で弁別されることを示す最小対立の例が指摘されていないので、これが真の母音音素を構成するかどうかについてはさらに検討が必要であろうと思われる。今回引用した資料のうち、Nikolaeva (1997) を除く他のテキスト集や記述ではこの母音音素 /ə/ は認められていない。

(A) 形態論的にはいわゆる膠着的なタイプを示す。すなわち、単語中の形態素同士の境界は明瞭であり、個々の形態素を取り出すことは比較的容易である。名詞と動詞の例をそれぞれあげる。例の中のハイフンは形態素の境界を表わす：

- (30) *eče:* *eče:-pe* *eče:-pe-gi*
 父 父 -PL 父 -PL-POSS
 「父」 「父（複数）」 「彼（ら）の父（複数）」⁷⁾

- (31) *eguʒu* *eguʒu-nu*
 歩き回る 歩き回る -PROG
 「歩き回る（動詞語幹）」 「歩き回っている（動詞語幹）」
eguʒu-nu-l'el
 歩き回る -PROG-INFL
 「歩き回っているそうだ（動詞語幹）」
eguʒu-nu-l'el-ŋi
 歩き回る -PROG-INFL-I3PL
 「彼らは歩き回っている（いた）そうだ」

形態素間における融合は散発的に認められるものの、事例は少ない。形態素間で融合が生じた例は次の通り：

- (32) *arpaj* *arpače*
 登る 登る /I1SG
 「登る（動詞語幹）」 「私は登る（登った）」

この右側の単語で /j/ の連続（動詞語幹末の /j/ と自動詞1人称単数の屈折接尾辞 -je の先頭の /j/）が融合して /č/ となる交替が認められる（*arpače* < *arpaj-je*）。これはこの言語で融合が生じるごく少数の場合のひとつである。

(B) 語幹につく接辞の種類は圧倒的多数は接尾辞である。その結果、典型的な単語の内部構造は次のようになる。単語の先頭には通常語基（base）が置かれる。この語基自体が語幹となるか、あるいは一つ以上の接尾辞（派生接尾辞や屈折接尾辞）がついて語幹が作られ、

7) この単語は「彼らの（一人の）父」の意味でも解釈可能である。コリマ・ユカギール語の名詞の複数マーカーは、所有マーカーとともに現れるときには、所有者が複数であるという意味と、被所有者が複数であるという意味とが、ともに解釈として成立しうる。

その語幹に接尾辞がつく⁸⁾。単語は通常、屈折接尾辞（語尾）によって閉じられる。上記の(30) および(31) の例の一部を再びあげる：

- | | |
|------------------------|---------------------------|
| (33) <i>eče:-pe-gi</i> | <i>eguzu-nu-l'el-ŋi</i> |
| 父 [語基] -PL-POSS | 歩き回る [語基] -PROG-INFL-I3PL |
| 「彼(ら)の父(複数)」 | 「彼らは歩き回っている(いた) そうだ」 |

Jochelson (1905) の記述においては、コリマ・ユカギール語は接尾辞と並んで、いくつかの接頭辞を有するとされている。しかしながら資料をより詳しく観察してみると、この「接頭辞」は実際のところは、語幹の前につくクリティック (proclitic 前倚辞) であると記述するほうが適当であると思われる：

- | | |
|----------------------------|------------------------|
| (34) <i>el=kel-l'el-ŋi</i> | <i>el=n'e=min-ŋi-t</i> |
| NEG= 来る -INFL-I3PL | NEG=RECP= 取る -I3PL-FUT |
| 「彼らは来なかった そうだ」 | 「彼らは結婚しないだろう」 |

ここで等号 (=) はクリティックの境界を示している。

(C) 形態論上の「頭部標示」(head-marking) / 「従属部表示」(dependent-marking) のパラメータ (Nichols 1992) に関しては、すでにニコルズ自身も指摘している通り、コリマ・ユカギール語は一貫したタイプを示さず、分裂 (split) を示す。たとえば「所有者—被所有名詞」からなる名詞句においては、頭部標示が見られる：

- | |
|-----------------------------------|
| (35) <i>taŋ paj ŋoromon'ul-gi</i> |
| その 女 親戚 -POSS |
| 「その女の親戚」 |

すなわち3人称の所有マーカー *-gi* は、この名詞句の頭部 (head) にあたる被所有名詞の側に接尾している。後置詞句においても、周的に同様の構造が指摘できよう：

- | |
|--------------------------|
| (36) <i>ke:je:-de-ge</i> |
| 前 -POSS-LOC |
| 「それ(ら)の前で」 |

8) 派生接尾辞は屈折接尾辞より、一般に語基に近い位置につく。ただし、動詞のアスペクトマーカーの一部のように、派生接尾辞より語基に近い位置に現れる屈折接尾辞もある。

ここでもまた3人称の所有マーカ-*-de*(斜格における*-gi*の交替形)は後置詞句の頭部(後置詞)に接尾している⁹⁾。一方で、名詞句において、名詞を形容詞的な単語が修飾するときには、形容詞的な意味を表わす単語、すなわち頭部ではない側に何らかのマーカ-がつく。これは従属部標示を示唆する:

- (37) *čomo:že* *ke:l'o:že* *fa:l*
 大きい-PTCP 乾いた-PTCP 木
 「大きな、枯れた木」

すなわちここでは、名詞句の従属部である形容詞的な要素(大きい、乾いた)の側に分詞のマーカ-がつき、名詞を修飾していることを標示するが、名詞句の頭部である名詞の側には被修飾のマーカ-はついていない。また、文においては、項の側に形態論的な格標示が(可能な場合には)行われるが、動詞の側に項の存在を直接標示するようなマーカ-が出現することはない:

- (38) *met* *tet-ul* *juö.*
 1SG 2SG-ACC 見る :T1SG
 「私は君を見た」

たとえばこの場合、項(主語と目的語)の側には格標示マーカ-が出現しうる(目的語における対格を示す*-ul*)のに対して、動詞の側に項の存在を直接標示するようなマーカ- (たとえば2人称単数目的語を標示する接尾辞)が現れることはない。文の主要部が動詞であると仮定すると、この状況は従属部標示を示唆していると言えよう。

(D) 語順の固定の度合から考えると、コリマ・ユカギール語は厳密ではない configurationalなタイプを示すと考えられる。このように考えられる理由は、文中の様々な種類の句(名詞句、後置詞句、動詞句など)において、句の内部の語順は一般に固定されていること、および外から移動して来た要素が句の中に自由に挿入されるような場合は非常に少ないことによる。ただしこの一般化はあくまで傾向でしかない。たとえば、文中の語順はしばしば情報構造を考慮して基本的語順から逸脱することがあり、結果として、動詞句内の語順における逸脱をもたらしうる。

(E) 格標示のシステムは、基本的には「主格・対格」型である。ここで主格はゼロ標識によっ

9) ただしすべての後置詞が同様の構造を取りうるわけではない。その意味で(36)のような構造はやや周延的なものと言えるかもしれない。

て標示されるのに対し、「対格」は何らかのマーカ―によって標示される。この状況が最も明瞭に認められるのは、主語が3人称であり、目的語が1人称あるいは2人称の場合である：

- (39) *Nikolaj-de: met-kele juö-m.*
 ニコライ -DIM 1SG-ACC 見る -T3SG
 「ニコライ君は私を見た」

ここでは主語の *Nikolajde*: 「ニコライ君」が格標識を何ら持たないのに対して (-*de*: は縮小形を作り出す派生接尾辞である), 目的語の *metkele* 「私を」は対格で標示されている。同様に、主語と目的語の一方が1人称、他方が2人称の場合にも、目的語に対格が標示される。上記の例文 (38) および次の例を参照されたい：

- (40) *tet met-ul eĵef-mik.*
 2SG 1SG-ACC 呼ぶ -T2SG
 「君は私を呼んだ」

ここで見られる人称代名詞の目的語における対格マーカ―は上であげた例文 (39) と異なることに注意されたい。さらに、主語と目的語がともに3人称の場合、同様に目的語にマーカ―が出現するが、その形はまた異なりうる¹⁰⁾：

- (41) *čuge-le far-l'el-u-m.*
 道 -INST 閉じる -INFL-0-T3SG
 「それ (=雪) は道を閉ざしてしまったようだ」

以上のようにこの言語では、基本的に「主格・対格」型でありながら、その「対格」の形は、主語と目的語の人称の組み合わせに影響されて交替するという特徴を有している。なお、主語が1人称あるいは2人称、目的語が3人称の場合には、主語にも目的語にも格標識は出現しない：

10) 例文 (41) では文脈上3人称単数の主語 (それ=雪) が表面に現れていないことに注意されたい。なお、目的語がこのケースで具格標示を受けるのは、目的語の定性が低い場合であると考えられる。目的語の定性が高い場合には対格 (-*gele*) が生じる。ただしこの使い分けには例外も認められるので、今後より深く検討する必要がある。

(42) *mit ti: fa:l-e ta:t taŋ marxil' motto-t-i.*

IPL ここで 木 -INST それから その 娘 封じ込める -FUT-TIPL

「私達はここで木を用いて、これからその娘を封じ込めよう」

この場合には、格標示が「主格・対格」型から逸脱し、中立型を示していると言えよう。

(F) この言語の主要な語順（構成素の配列される順番）は次の通りである：

(F-1) 文中では主語は一般に先頭に置かれる。その後目的語（もしあれば）が続き、文の末尾には動詞（述語）が置かれる。基本的な語順のタイプはSOV型である。例としては上記の例文(38)から(42)までを参照されたい。

(F-2) 前置詞は持たず、後置詞のみを持つ。後置詞句の内部の語順は「名詞—後置詞」である：

(43) *nume kiejie pie budie*

家 前 山 上

「家の前に」 「山の上で」

(F-3) 修飾語 (modifier) は、それが修飾する名詞の前に置かれる。なお、コリマ・ユカギール語は語類としての形容詞を持たず、「形容詞」的な機能は、動詞の屈折形式の一つである分詞によって果たされる¹¹⁾。名詞句の内部の語順は「[形容詞]—名詞」である。例としては上記の例文(37)を参照されたい。

(F-4) いわゆる関係節は、それが修飾する名詞の前に置かれる。関連して、関係節の構造について簡単に触れておく。関係節を構成する際に用いられる関係節内の動詞の屈折形式には3つの種類 (-je 分詞, -me 分詞, 動名詞) がある。それぞれの例をあげてみよう。まず関係節内の動詞が -je 分詞である関係節の例は次の通りである（角括弧は節の境界を表わす）：

(44) *ekfil' a:-je foromo*

[ボート 作る -PTCP] 人

「ボートを作った人」

-je 分詞を持つ関係節は主語に接近可能である。なお、上記の例文(37)であげた「[形容詞]—名詞」構造も同種の関係節で、関係節内の動詞は -je 分詞となる。次に関係節内の動詞が -me 分詞である関係節の例は次の通りである：

11) ここで分詞 (participle) とは、筆者が遠藤 (2005) で「形動詞」として記述したものと同一のものである。

- (45) *met a:-me ekfil'*
 [1SG 作る -PTCP:1SG] ボート
 「私が作ったボート」
- (46) *tiŋ foromo a:-mele ekfil'*
 [この人 作る -PTCP:3SG] ボート
 「この人が作ったボート」

この種類の関係節は目的語に接近可能である。次に、関係節内の動詞が動名詞である関係節の例は次の通りである：

- (47) *anjē-gi embe-l foromo*
 [目 -POSS 黒い -VN] 人
 「目（瞳）が黒い人」
- (48) *met modo-l nume*
 [1SG 住む -VN] 家
 「私が住んだ家」

この種類の関係節は、被所有名詞・斜格に立つ名詞に接近可能であるほか、主語・目的語にも接近可能である¹²⁾。

コリマ・ユカギール語の概観をしめくくるにあたって、最後に文字について触れておくことにしたい。コリマ・ユカギール語はかつて文字表記の伝統を持たない言語であったが、学校教育の発達により、近年になってこの言語の初等教科書が出版されるに至り、キリル文字に基づいて、コリマ・ユカギール語のための文字が作られた。ただし、細部における表記の統一などの課題がまだ残されており、正書法が定められたと言える段階にはまだ至っていない。現在はこの初等教科書を用いて、子どもたちにコリマ・ユカギール語の読み書きを教える授業が現地の小学校で行われている。

4. 文の基本的構造

ここまでコリマ・ユカギール語の概略を述べ、その主要な類型論的特徴を見てきた。この節では、以上のような特徴を持つコリマ・ユカギール語の文の基本的構造を概観していくこ

12) これら3種の屈折形式の使い分けは、基本的には、どの範囲の文法関係に立つ名詞句に接近可能かという観点から記述できると考えられる。ただし若干の例外も認められるので、細部の検討は今後の課題として残されている。

とにする。まずこの言語が持つ2種類の主要な文タイプについて述べ、次に主節と従属節について述べることにする。

4.1 主要な文タイプ

コリマ・ユカギール語は2種類の主要な文タイプを有する。その第1は動詞を述語とする文である。これを動詞文と呼ぶ。次に例をあげる：

- (49) *taj foromo-pul parna: azu:-gele medi-nu-l'el-ŋa:*
 その人 -PL 鴉 ことば -ACC 聞く -PROG-INFR-T3PL
 「その人々は鴉のことばが分かったようだ」
- (50) *irki-n anil aj kies'*¹³⁾
 一つ -ATTR 魚 再び 来る /I3SG
 「一匹の魚がまたやって来た」

この二つの文はいずれも動詞文である。まず例文(49)では、主語である *taj foromopul* (その人々) が文の先頭に立ち、目的語 *parna: azu:gele* (鴉のことばを) が続き、最後に述語である他動詞 *medinul'elŋa:* (彼らは理解していたようだ) が置かれる。この語順は、すでに前の節で述べたような、この言語の基本的な語順である SOV 型を示している。また、述語となる動詞は、人称と数において主語と一致する(目的語との一致はない)。次に例文(50)では、主語である *irkin anil* (一匹の魚) が先頭に立ち、副詞 *aj* (再び) を挟んで、最後に述語である自動詞 *kies'* (それが来た) で閉じられる。この自動詞もまた、人称と数において主語と一致する。この語順も SOV 型に合致する。なお、主語と動詞との一致が生じる場合、動詞に現れる人称と数のマーカーは、動詞が自動詞の場合と他動詞の場合とで異なったパラダイムを持つ¹⁴⁾。

第2の文タイプは、名詞を述語とする文である。これを名詞文と呼ぶ。この文は、概略「～は～です」のように、トピックとして何らかの名詞・代名詞を提示し、それを他の名詞で説明する際に用いられる。次の会話例を参照されたい：

13) この文の末尾の *s'* は、音素 */s/* の自由交替形 *[ʃ]* を表わす。両者の間には性別や出身地による使い分けがされている可能性もあるので、記述上必要と判断したものである。

14) たとえば3人称複数マーカーの違いとして、例(33)の右側の単語の末尾の *-ŋi* (自動詞) と、例(49)の最後の単語の末尾の *-ŋa:* (他動詞) を対照されたい。

(51) [二人の会話]

- A: *tituön* *nem-dik?*
 ここにあるこれ 何 -FOC
 「(ここにある) これは何ですか?」
- B: *tuön* *lunbuge-lek.*
 これ 鍋 -FOC
 「これは鍋です」

この二つの文はいずれも名詞文である。まず問いの文は、*tituön*（目の前にあるものを指す指示代名詞）に対して、疑問代名詞 *nem(e)* 「何」を用い、「何ですか」と説明を求めている。この文中には動詞が存在せず、したがって動詞に標示された主語との一致要素もないことに注意されたい。名詞が述語機能を果たすのに必要な要素は焦点標識 *-dik* である¹⁵⁾。一方答えの文は、代名詞 *tuön* 「これ」のトピックに対し、*lunbugelek* 「鍋です」と説明している。ここにも焦点標識 *-lek* が認められる。名詞文の現れる頻度は動詞文ほど高くないけれども、重要な文タイプの一つである。

4.2 主節と従属節

節が文を構成するとき、節は主節あるいは従属節となる。主節は発話の中で、それ自体独立して用いることができる節であり、動詞は定形 (*finite*) となってその最後に置かれる。上で動詞文の例としてあげた文例はいずれも主節であり、定形である動詞はそれぞれ、*medinul'elɣa*: および *kies'* である。この両者ともに、動詞の自他に応じた人称・数マーカ存在が認められる。一方、従属節は発話の中で独立には用いられない。動詞は非定形 (*non-finite*) となって、節の末尾に置かれる。この言語における非定形動詞には、分詞、副動詞、動名詞などいくつかの種類がある。なお、名詞文に相当する節を従属節として用いることはない。

従属節は三つの統語的機能のいずれかを有する。名詞に相当する機能を持つ従属節は補部、形容詞に相当する機能を持つ従属節は関係節、そして副詞に相当する機能を持つ従属節は副詞節と呼ぶ。この三種類のうち、本論文は副詞節のみを扱う¹⁶⁾。副詞節を含む複文の例は次の通りである：

15) この言語の焦点標識は、談話上の焦点 (*focus*) を標示しうる機能に加えて、接尾した名詞が述語機能を果たしうるという機能もある。

16) 関係節については3節の (F-4) でごく少数の例をあげた。補部については本論文の範囲外と考えて、ここでは例をあげていない。

- (52) *ijl'e-lle* *tude* *čerčeguije* *min-delle* *ta:t* *aji:-m*
 [恐れる -CONV] [3SG.POSS 銃 取る -CONV] それから 撃つ -T3SG
 「(彼は) 恐くなって、銃を取って、(それを) 撃った」

この複文は三つの節からなるが、最初の二つは従属節であり、最後の節は主節である。最初の従属節は非定形動詞（副動詞）*ijl'elle*「恐れて」だけから成る。二番目の従属節はもう少し複雑で、末尾の副動詞 *mindelle*「取って」とその目的語 *tude čerčeguije*「彼（自身の）銃」を含んでいる。副動詞は節内にそれ自身が対応する主語を持たない。これに対応して、副動詞に主語との一致要素が認められないことに注意されたい。この複文の主節は文の最後に位置しており、副詞 *ta:t*「それから」と定形動詞 *ajim*「彼は（それを）撃った」を含んでいる。定形動詞には人称と数のマーカーが標示されており、談話上省略されているものの、この定形動詞に対応する主語は主節中に存在しうる。この例に見るように、副詞節を含む複文はしばしば、副詞節の機能を持つ従属節をいくつか従えた長い鎖状の構造を成している¹⁷⁾。このような複雑な構造を明確に示すために、グロスの中では節の境界を角括弧で示している。

5. 副詞節を含む複文の特徴

この節では、コリマ・ユカギール語における節接続のデータを考察する際の前提となる、副詞節を含む複文の諸特徴のうち、特に重要な3点を指摘しておきたい。最初にこのような複文に用いられる非定形動詞の様々な形式を一覧したのち、次にこの種の複文に見られる指示転換（switch-reference）について見る。そして最後に、このような複文が表わす事態における時間関係について観察することにする。

5.1 非定形動詞の諸形式

すぐ上で述べたように、副詞節を含む複文はしばしば、副詞節の機能を持つ従属節をいくつか含む長い鎖状の構造を成すことがある。このような複文は一般に従属節で始まり、場合によってはいくつかの従属節が続いた後、最後に主節が現れる。このような複文における副詞節に用いられる動詞はいずれも非定形（non-finite）であり、独立した文を構成する機能を持たない。

上記のような構造における非定形動詞として、コリマ・ユカギール語には次のような種類がある：

(A) 副動詞

-*t* 主節の示す動作・状態と同時進行的に起こっている動作・状態を示す。また主節の示

17) 遠藤（2005）ではこのような構造を「節連鎖」（clause chain）という用語を使って記述した。本論文で重要なキーワードとなっている「節接続」との混乱を避けるため、ここでは「節連鎖」の用語を用いない。

す動作・状態に対して背景的な動作・状態を示す。

-*de* 主節の示す動作・状態と同時進行的な動作・状態を示す¹⁸⁾。

-*delle* 主節の示す動作に先行する動作を示す。状態的な意味の動詞がこの副動詞になることは稀である¹⁹⁾。

el= ~ *-čüön* 主節の示す動作・状態と同時進行的に起こっている動作・状態を示す。否定の意味のクリティック *el=* が含まれていることからわかるように、否定的な意味を伴い「~せずに、~しないで、~することなく」などの意味となる。

(B) 動名詞の所格形

動名詞 (-*l*) が所格 (locative) に屈折した形である。主節の示す動作・状態と同時進行的な動作・状態を表わすこともあり、また、主節の示す動作・状態に先行する動作・状態を表わすこともある。動名詞それ自身の主語を標示する人称・数マーカーを持ち、具体的な形は次の四つである：

(53) *-lge* (1 人称単数, 2 人称単数)

-dege (3 人称単数)

-luke (1 人称複数, 2 人称複数)

-ɲidege (3 人称複数)

これら諸形式について、より詳細な形態論的分析を試みてみよう (Krejnovič 1982)。1 人称・2 人称の二つの形式に含まれる *-l* は動名詞の標識である。同じく 1 人称と 2 人称の形式に含まれる *-ge* は所格の形式であり、単数ではそのままの形で表れるが、複数では *-ke* に交替する。3 人称の二つの形式に含まれる *-de* は名詞の (斜格における) 所有マーカーである。3 人称の形式にもやはり所格マーカー *-ge* が含まれており、複数の場合はさらに (動詞の人称屈折における) 複数マーカー *-ɲi* が含まれる。

以上に加えて、仮定を表わす形式がある。これには次のような種類がある：

(C) 副動詞 (仮定)

-*ɲide* 主節の表わす事態が起こるための条件や仮定 (「もし~すれば、もし~なら (ば)」) を表わす。

-*l'elɲide* 主節の表わす事態が起こるための、反実仮想的な仮定 (「もし~するのだったら、もし~したのだったら」) を表わす。

(D) 動名詞の所格形 (仮定)

18) 後続する音素に条件づけられた異形態として *-te* がある。

19) 後続する音素に条件づけられた異形態として *-telle*, *-relle* が、また先行する語幹に条件づけられた異形態として *-lle* がある。

主節の表わす事態が起こるための条件や仮定を表わす。動名詞それ自身の主語を標示する人称・数マーカーを持ち、具体的な形は次の四つである：

- (54) *-lgene* (1人称単数・2人称単数)
-dejne (3人称単数)
-lukene (1人称複数・2人称複数)
-njidejne (3人称複数)

形態論的にはこれらの形式は、上記の(B)「動名詞の所格形」にさらに仮定のマーカー *-ne* が接尾したものと分析できる。

これらに対して、主節の表わす事態が起こるための、反実仮想的な仮定を表わす諸形式は次の四つである：

- (55) *-l'elgene* (1人称単数・2人称単数)
-l'eldejne (3人称単数)
-l'elkene (1人称複数・2人称複数)
-l'eljidejne (3人称複数)

これらの形式には、上記の(C)の *-l'eljide* と同じく、接尾辞 *-l'el* が含まれている。これは推測法のマーカーと形態上同一であるが、反実仮想の意味を表わすマーカーと考えることも可能であろう。

5.2 指示転換

直前の節であげた非定形動詞の諸形式は、すでに Jochelson (1905) や Krejnovič (1958) が指摘しているように、後続する節の主語が、当の非定形動詞が属する節の主語と同一であるかどうかによって使い分けられている強い傾向がある。すなわち、副動詞(上のリストでは(A)と(C)の諸形式)は一般に後続する節との間で主語を変えないのに対して、動名詞の所格形(上のリストでは(B)と(D)の諸形式)は後続する節と違う主語を持つ、という傾向である。Maslova (2003) は現代の言語学の視点からこれを一般化し、コリマ・ユカギール語は指示転換の仕組みを持つと記述している。その記述では、副動詞はSS(同主語)マーカー、一方、動名詞の所格形はDS(異主語)マーカーとされる。次の複文をこの視点から観察してみよう：

- (56) *čaj o:ʒe-t modo-luke met ejme-n ada:-n*
 [茶 飲む -CONV] [座る -12PL.VN.LOC] 1SG 向こう -PROL ここ -PROL
 SS DS
puʒeʒe-s'
 明るくなる -13SG
 「茶を飲んでいると、向こう側が明るくなった」(Maslova 2003:370)

この複文において、最初の従属節 *čaj o:ʒet* 「茶を飲んで」は副動詞、つまり SS マーカーを含んでいる。それゆえ、二番目の従属節 *modoluke* 「座っていると」はこの節と同じ主語を保持する。他方、二番目の従属節は動名詞の所格形、つまり DS マーカーを含むため、それに後続する節（主節）では異なった主語が現れる（この例では 3 人称単数の主語）²⁰⁾。なお、この例に見られるように、この言語では標示節（marked clause）は制御節（controlling clause）の直前に置かれる。

なお、複文の中で異主語への転換が起こるのは 1 回であることが多いが、適切な文脈を与えればさらにもう 1 回異主語に転換することも可能である。次の例を観察されたい。

- (57) *tet čaj o:ʒe-t modo-lge Nikolaj-de: kel-dege*
 [2SG 茶 飲む -CONV] [座る -12SG.VN.LOC] [ニコライ -DIM 来る -3SG.VN.LOC]
 SS DS DS
tet n'e-leme-de: el=mo-ʒek.
 2SG NEG-何 -DIM NEG=言う -NEG/2SG
 「君が茶を飲んでいる時、ニコライ君が来ると、君は何も言わなかった」

ここでは、第 2 の従属節から第 3 の従属節に移る際に 1 回目の主語の転換が起こり（君→ニコライ）、さらに第 3 の従属節から後続の節（主節）に移る際に再び主語の転換が起こっている（ニコライ→君）。指示転換の仕組みを考えることにより、このようないささか複雑な例も適切に説明することができる。

20) 動名詞の所格形が DS マーカーとして機能しうる主要な要因としては、この形に含まれる所有マーカー *-de* がある。この所有マーカーは、動名詞の所格形が「所有者」を有し、その所有者との間で「所有者-被所有者」という統語的關係を結ぶことを許す。所有者を当該従属節の主語と解釈するならば、動名詞の所格形はそれ自身の「主語」を持つことができる。こうして動名詞の所格形を含む従属節が後続する節と異なった主語を持つことが可能になったと考えられる。

5.3 時間関係

この節の最後に、副詞的な従属節を含む複文が表わす事態における時間関係について観察してみよう。Maslova (2003:382) は、このような鎖状の複文において、「非定形節は、制御節の表わす状況に後続するような状況を、決して表わすことがない」(382; 筆者訳) と述べている。これは、この種の複文の示す強い意味上の制約である²¹⁾。たとえば次の複文は3つの状況を表現している：

- (58) *jokumu-lle kimji-lle kebej-l'el.*
 [怒る -CONV] [喧嘩する -CONV] 行く -INFL.I3SG
 「彼女は怒って、(夫と) 喧嘩して、出ていったそうだ」

ここで最初に起こった状況は「怒った」ことであり、次に「(夫と) 喧嘩をした」状況が起こり、最後に「出ていった」状況が起こったのである。そしてこれらの状況は、複文中における従属節の順番と一致している。

複文中に、主節の示す動作・状態と同時進行的に起こっている動作・状態を示すような非定形動詞が含まれる場合、状況同士が時間的に重なり合うこともある：

- (59) *ta:t xodo-t xojl lebe:-d+emej-nin örn'e-nu-l'el.*
 それから [横たわる -CONV] 神 地 -ATTR+母 -ALL 泣く -PROG-INFL/I3SG
 「それから地面に横たわって、(彼女は) 地母神に泣いて訴えていたそうだ」

しかしこのような場合においても、従属節が表わす *xodot* 「横たわったまま」という状況は、主節が表わす *örn'enul'el* 「(彼女は) 泣いていたそうだ」という状況に後続することはない。両者の状況は時間的に重なり合っているかもしれないが、上記の意味的な強い制約はここにも働いている。

以上に整理したような二つの意味的な特徴、すなわち指示転換の仕組みと時間関係は、副詞的な従属節の鎖状の連なりからなる複文を成立させる上で重要な役割を果たしている。これらの意味的な特徴から外れるような意味関係は、一般にこの種の複文によっては表わされないのである。

21) すでに直前の節で述べたように、この言語では一般に、制御節は当該の節に後続する。したがってこの意味的制約は、ある節で表わされている状況は、次の節で表わされている状況より、時間的に後に起こっていることはない、と言い換えることができよう。

6. 「節接続の五段階」のデータの検討

この節では、コリマ・ユカギール語における「節接続の五段階」について、具体的なデータをあげつつ、それらの検討を行っていくことにしたい。以下では、角田(2004)と角田(2012)にならない、原因・理由、条件、逆接の3つの意味領域について、「節接続の五段階」に相当する例が見いだせるかどうかを検討していく。なお、以下で個々の副詞節マーカーに言及する際にはそのマーカー自身をあげるが、マーカーのグループに言及する必要がある場合には、上記5.1節における(A)から(D)までの分類をグループ名として用いることにする。

6.1 原因・理由

レベル I [現象描写] - [現象描写]

(60) *tabun medi:-t ile uō-r-pe a:j iŋl-a:-ŋi.*

[これ 聞く -CONV] 何人かの 子 -0-PL 再び 恐れる -INGL-I3PL

「これを聞いて、子どもたちは再び恐がった」(Maslova 2003:387)

(61) *met fa:l budie-t loudu-luke met nojl fal'gede-j.*

[1SG 木 上 -ABL 落ちる -12PL.VN.LOC] 1SG 脚 折れる -I3SG

「私は木から落ちて、脚が折れた」

(62) *mət omos'ə pugēs'ə moro-dəllə mət kapkan-pə jō-din kebes'ə.*

[1SG 良い /PTCP 暖かい /PTCP 着る -CONV] 1SG 罨 -PL 見る -SUP 行く /1SG

「私は良い暖かい服を着て、罨を見に出かけた」(Nikolaeva 1997:67)

以上2例は、副動詞(A)および動名詞の所格形(B)を用いた例である。コリマ・ユカギール語では原因・理由を表わすような専用の副詞節マーカーは存在しない。そのため、文脈によっては原因・理由の意味がやや薄くなることもある。このほか、次のように完了の意味を伴った動名詞の離格形が用いられることがある：

(63) *ti:ne tet ibil'-o:l-get ediŋ nodo-pe a:j kel-ŋi.*

[最近 2SG 泣く -RES-ABL] その 鳥 -PL 再び 来た -I3PL

「最近君が泣いたから、その鳥たちが再びやって来たのだ」(Maslova 2003:432)

この形はおそらく、原因・理由を最もはっきりと表わす表現であろうと思われるが、テキスト中での出現頻度は非常に小さい。

Level II [現象描写] - [現象描写 + 判断]

(64) *tabun juö-t aplitaj aja:-l'el.*

[これ 見る -CONV] アプリタイ 喜ぶ -INFL/I3SG

「これを見て、アプリタイは喜んだそうだ」(Maslova 2003:387)

(65) *ta:tmie u.jčo:-d'e foromo-pul i:s' moda:-nunnu-l'el-ni*

[このような 働く -PTCP] 人 -PL 長く 生きる -HAB-INFL-I3PL

qojl qamie-dege.

[神 助ける -3SG.VN.LOC]

「このような働き者の人は長く生きるそうだ、神様が(彼らを)助けるから」(Maslova 2003:388)

(66) *čuöte ibil'e-dege tude-gele peffej-delle kewej-l'el-ni*

[いつも 泣く -3SG.VN.LOC] [3SG-ACC 投げる -CONV] 行く -INFL-I3PL

emej-gi ečie-de-n'e.

母 -POSS 父 -POSS-COM

「いつも(その子は)泣いていたので、母と父は(その子を)捨てて出ていったそうだ」(Maslova 2003:387)

以上2例は、副動詞(A)および動名詞の所格形(B)を用いた例である。主節の動詞に含まれる推測法マーカー *-l'el* によって、描写されている現象に対する話者の判断(伝聞あるいは推測であり、話者が直接見聞きした事態ではない)が示されている。このほか、次のように完了の意味を伴った動名詞の離格形が用いられることがある：

(67) *<...> əl unzu:-nu-l'əl-ni toukə ojje-l-gət.*

NEG 眠る -PROG-INFL-I3PL [犬 鳴く -VN-ABL]

「彼らは眠れなかったそうだ、犬が鳴いていたので」(Nikolaeva 1997:20)

レベル III [現象描写] - [現象描写 + 働きかけ]

(68) *jerčeba: förire-f-telle tet-ul ta:s'ile forile-f-u-t.*

[カモ 塗る -CAUS-CONV] 2SG-ACC それから 塗る -CAUS-0-FUT/T1SG

「カモを塗ってしまって、それから君を塗ってあげよう」(Maslova 2003:537)

このレベルの例は非常に少ない²²⁾。上の例は副動詞 *-delle* を用いた例である。主節の動詞に

含まれる未来時制マーカー *-t* によって、話者による働きかけ（～しよう）が示されている。ただし、この例がレベル III の例として適当であるかどうかについては疑問が残る。というのは、この構造においては、従属節が未来時制の表わすモダリティを共有する解釈（「カモを塗り、君も塗ってあげよう」）も可能であるからである。仮にこの解釈を取った場合、従属節は現象描写をしていないということになるだろう。また、完了の意味を伴った動名詞の離格形の例は、このレベルでは見出されなかった。

レベル IV [判断の根拠] – [判断]

このレベルの例は見出されなかった。

レベル V [発話行為の前提] – [発話行為]

このレベルの例は見出されなかった。

6.2 条件

レベル I [現象描写] – [現象描写]

(69) *joule-ŋo:-t* *gude-t* *pen emiče:-j*.
 晩 - ～である -CONV なる become-CONV] 外 暗くなる -I3SG
 「晩になると、暗くなる」

(70) *čejje-ŋo:-t* *gude-t* *pen čelke:-j*.
 [冬 - ～である -CONV なる -CONV] 外 寒くなる -I3SG
 「冬になると、寒くなる」

(71) *almə* *ukej-dəgə* *tiŋ foromə aj ukəs', <...>*.
 [シャーマン 外に出る -3SG.VN.LOC] この 人 再び 外に出る -I3SG
 「シャーマンが外に出ると、この男もまた外に出た」 (Nikolaeva 1997:22)

以上は副動詞 (A) を用いた例である。

✓ 22) 主節に命令形が生じることは、この構造では不可能である。主節に命令形が生じる場合、従属節には仮定を表わす副詞節のマーカーが必要となる (6.2 節参照)。おそらくはこのことが、このレベルでの適切な例が非常に少ないことの原因だろうと思われる。

レベルII [現象描写] - [現象描写 + 判断]

- (72) *kudede-ŋide edij puŋnina-gi čumu mid'-u-t.*
 [殺す -CONV.COND] その 毛皮 -POSS すべて 取る -0-FUT/T1SG
 「(彼を) 殺したら, 俺は彼の毛皮をすべて取ってやろう」(Nikolaeva 1989b:14)

- (73) *tudel numō-ge kel-dej-ne kudde-t.*
 [3SG 家 -LOC 来る -3SG.VN.LOC-COND] 殺す -FUT/T1SG
 「彼が家に帰ってきたら, (彼を) 殺してやろう」(Maslova 2003:394)

- (74) *nigijē mit pundu-l'elge-ne met=omoč.*
 [昨日 1PL 話す -INFL.VN.LOC-COND] AFF.IRLS= 良い /I3SG
 「昨日 (そのことを) 話していたら, 良かったのに」

以上の三つの例は, 仮定の意味を持つ副動詞, あるいは仮定の意味を持つ動名詞の所格形が用いられた例である。指示転換の仕組みにより, 最初の例では節を超えて同じ主語が保持されているのに対し, 続く二つの例では従属節から主節に移る時に主語の変転が起こっていることに注意されたい。

レベルIII [現象描写] - [現象描写 + 働きかけ]

- (75) *qa:qa:, met poŋis'e leŋ-d-o:l'-ŋide kiete-din noho*
 祖父 [1SG 脂身 食べる -DETR-DESD-CONV.COND] 混ぜる -SUP 砂
mundej-k.
 持ってくる -IMP.2SG
 「お祖父さん, 私の脂身を食べたいのだったら, (それに) 混ぜるための砂を持ってきてください」(Nikolaeva 1989a:90)

- (76) *mit tij and'e-n'e kebej-luke-ne mit jola:t*
 1PL この 王子 -COM 行く -12PL.VN.LOC-COND] 1PL 後から
kel-ŋik.
 来る come-IMP.2PL
 「私たちがこの王子と行く場合には, 私達の後からついてきてください」
 (Nikolaeva 1989b:36)

以上の例では, 仮定の意味を持つ副動詞, あるいは仮定の意味を持つ動名詞の所格形が用い

られている。主節の命令形はこの構造において生じる。指示転換の仕組みにより、最初の例では節を超えて同じ主語が保持されているのに対し、次の従属節から主節に移る時に主語の変転が起こっていることに注意されたい。

レベル IV [判断の根拠] – [判断]

- (77) *el=kel-luke-ne* *m=amde-je.*
 [NEG= 来る -12PL.VN.LOC-COND] AFF= 死ぬ -I1SG
 「もし私が来なかったら、(それは) 私が死んだということだ」(Nikolaeva 1989b:36)

- (78) *tudel eksil'-gi čuö uj-o:-dej-ne*
 [3SG ボート -POSS すでに 作る -RES-3SG.VN.LOC-COND]
tud-in qamie-d'a:-l'el-ni.
 3SG-ALL 助ける -DETR-INFL-T3PL
 「もし彼のボートがすでに出来上がっていたら、彼らが^s(彼を) 助けたのだ」
 (Maslova 2003:398)

レベル V [発話行為の前提] – [発話行為]

このレベルの例は見出されなかった。

6.3 逆接

逆接の表現は、コリマ・ユカギール語では非常に稀である。Maslova (2003:399) は逆接の表現は節の末尾の小辞 *tit* 「だが (although)」を用いると述べるが、筆者はこの小辞を今までに確認したことがなく、実際にテキスト資料でもほとんど見出されない。

レベル I [現象描写] – [現象描写]

- (79) *me:me: o:-l'el tit met foromon'ul.*
 [熊 ~である -INFL/I3SG だが^s 1SG 親戚
 「熊のように見えるが、(彼は) 私の親戚だ」(Nikolaeva 1989b:34)

このレベルにおいて確認できる上記の例は、実際には二つの短い節、つまり *me:me: o:-l'el*「(彼は) 熊のようだ」と *met foromon'ul*「(彼は) 私の親戚だ」を単に並列したものであり、節接続の適切な例とは必ずしも言えないと思われる。

レベルII [現象描写] - [現象描写 + 判断]

(80) *pen jowle-j-dej-ne**tit taŋ terike-gi*

[外 晩になる -PFV-3SG.VN.LOC-COND だが] その 妻 -POSS

aŋči:-din kewe-j-l'el.

捜す -SUP 行く -PFV-INFL/I3SG

「すでに晩になっていたが、彼の妻は(彼を)捜しに行こうとしたそうだ」(Maslova 2003:398)

レベルIII [現象描写] - [現象描写 + 働きかけ]

このレベルの例は見出されなかった。

レベルIV [判断の根拠] - [判断]

このレベルの例は見出されなかった。

レベルV [発話行為の前提] - [発話行為]

このレベルの例は見出されなかった。

7. 結果のまとめ

以上の観察から得られた結果を、以下の表にまとめておく(表3)。ここでプラス(+)はそのレベルにおける例が一定数見出されたもの、三角(△)はそのレベルにおける例がごく少数であったもの、マイナス(-)はそのレベルにおける例が見出されなかったもの、をそれぞれ示している。

<表3> コリマ・ユカギール語における節接続の五段階

	レベルI	レベルII	レベルIII	レベルIV	レベルV
原因・理由					
副動詞	+	+	△	-	-
動名詞の所格形	+	+	-	-	-
動名詞の離格形	△	△	-	-	-
条件					
副動詞	+	-	-	-	-
動名詞の所格形	+	-	-	-	-
副動詞(仮定)	-	+	+	+	-
動名詞の所格形(仮定)	-	+	+	+	-
逆接					
動名詞の所格形(仮定)	-	△	-	-	-

表3が示すように、コリマ・ユカギール語では、原因・理由を表わす副詞節においては、副詞節マーカの出現が、「節接続の五段階」における五つのレベルに沿って起こる。3種類の副詞節マーカのうちでは、副動詞(A)が最も高いレベルまで使われ(レベルI～レベルIII)、動名詞の所格形(B)はそれに次ぐ(レベルI～レベルII)。そのほか完了の意味を伴った動名詞の離格形も散発的に生じることがある。

条件を表わす副詞節では計4種類の副詞節マーカが生じうるが、レベルIのみに副動詞(A)および動名詞の所格形(B)が生じる。副動詞(仮定)(C)と動名詞の所格形(仮定)(D)は、レベルII～IVに生じる。

逆接を表わす副詞節の生起は稀であり、現時点では確実な結果を導くことができないが、副詞節マーカのある副詞節のデータが確認できたのはレベルIIのみであった。

8. 結びにかえて

この論文の目的は、コリマ・ユカギール語の複文のデータを観察することによって、節接続の意味のおよび語用論的な性質という観点から、副詞節と主節がどのように結びつくことができるかという可能性を検討することであった。その結果、表3に見られるように、この言語の副詞節(とりわけ原因・理由、条件、そして逆接という三つの意味を表わすような副詞節)における副詞節マーカの出現が、一般的に言って、角田(2004)および角田(2012)で提案されたような「節接続の五段階」の諸レベルに沿って起こっていることを確認した。このことは、日本語をはじめとする他の諸言語とも共通する、節接続に関する諸特徴がコリマ・ユカギール語にも認められることを示している。またそのことは翻って、「節接続の五段階」の仮説の有効性を示していると思われる。

もとより現時点では、この言語のすべての節接続のデータを確認したとは言えない。したがって上記で得られた結果は、今後もデータにあたることによって再検討される余地を含んでいるだろう。しかしながら、「節接続の五段階」の仮説が副詞節の意味と用法の記述にあたって有力な道具を提供してくれるとすれば、この仮説を参考にすることによって、コリマ・ユカギール語の複文の記述をより詳細な段階にまで進めることができる可能性が示されたことになろう。

省略記号一覧

ABL=ablative, ACC=accusative, ALL=allative, ATTR=attributive, CAUS=causative, COND=conditional, CONV=converb, DESD=desiderative, DETR=detransitive, DIM=diminutive, FOC=focus, FUT=future, HAB=habitual, I=intransitive, INFR=inferential, INGL=ingressive, LOC=locative, NEG=negative, PFV=perfective, PL=plural, POSS=possessive, PROG=progressive, PROL=prolative, PTCP=participle, VN=verbal noun, RES=resultative, SG=singular, SUP=supine, T=transitive, 0=inserted vowel

参考文献

- Collinder, Björn (1940) Jukagirisch und Uralisch. *Uppsala Universitets Arsskrift* 8: 1-143.
- Jochelson, Waldemar (1905) Essay on the grammar of the Yukaghir language. *American Anthropologist* new series 7 (2) : 369-424.
- Krejnovič, E. A. (1958) *Jukagirskij jazyk*. Moskva/Leningrad: Nauka.
- (1982) *Issledovanija i materialy po jukagirskomu jazyku*. Leningrad: Nauka.
- Maslova, Elena (2003) *A grammar of Kolyma Yukaghir*. Mouton Grammar Library 27. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- Nichols, Johanna (1992) *Linguistic diversity in space and time*. Chicago and London: The University of Chicago Press.
- Nikolaeva, Irina A. (ed.) (1989a) *Fol'klor jukagirov verxnej kolymy, čast' I*, Jakutsk: Jakutskij Gosudarstvennyj Universitet.
- (ed.) (1989b) *Fol'klor jukagirov verxnej kolymy, čast' II*, Jakutsk: Jakutskij Gosudarstvennyj Universitet.
- (1997) *Jukagir texts*. Specimina Sibirica XIII. Szombathely: Savariae.
- 遠藤 史 (2005) 『コリマ・ユカギール語の輪郭—フィールドから見る構造と類型』名古屋：三恵社。
- 角田 三枝 (2004) 『日本語の節・文の接続とモダリティ』東京：くろしお出版。
- 角田 太作 (2012) 「節接続の五段階」『国語研プロジェクトレビュー』7: 13-21. 東京：国立国語研究所。

Notes on Five Levels in Clause Linkage in Kolyma Yukaghir

Fubito ENDO

Abstract

This paper aims to explore how the adverbial subordinate clause is combined with the main clause in Kolyma Yukaghir, a language isolate spoken in northeastern Siberia, from the viewpoint of semantic and pragmatic features in the clause linkage. A detailed analysis of the Kolyma Yukaghir data reveals that the occurrence of adverbial clause markers is explicable in terms of the “five levels in clause linkage,” a hypothesis proposed by Tsunoda (2004) and Tsunoda (2012). For example, the converb that expresses cause and reason is available in Levels 1 to 2 and marginally available in Level 3, while it is not available in Levels 4 to 5. Moreover, the locative form of the verbal noun (with the conditional marker) that denotes condition occurs only in Levels 2 to 4, while it does not occur in Levels 1 and 5. This shows that Tsunoda’s “five levels in clause linkage” can provide an insightful framework to discuss various types of complex sentences in Kolyma Yukaghir in semantic and pragmatic terms.